

## 宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」とシベリア出兵

—— 啄木短歌・「カルメン」・「戦争と平和」との関係を探る ——

米地 文夫\*

**要 旨** 宮沢賢治は石川啄木の短歌に強い影響を受けたが、啄木の北へ走る電柱列の歌も、賢治の童話「月夜のでんしんばしら」に影響を与えた。「月夜のでんしんばしら」は停車場近くの線路で電信柱の列が兵隊になり歩き出す話で、電気総長が号令をかけていた。汽車が来ると電信柱に戻る。従来は電気と鉄道の童話とされていたが、シベリア出兵の日本軍、特に花巻で演習をした盛岡駐屯の工兵隊などの出動を素材にしたことがわかった。賢治作曲の彼らの軍歌はオペラ「カルメン」の「アルカラの竜騎兵」の曲と日本陸軍のラッパの曲とを基にしている。作品に工兵のほか竜騎兵や擲弾兵など19世紀の欧州の古風な兵種名が登場するのは、ロシアに攻め込んだナポレオン軍の敗退をシベリア出兵に重ねたからで、トルストイの小説「戦争と平和」やハイネの詩「二人の擲弾兵」などを念頭に置いている。電気総長は当時の日本陸軍の実質上の最高指揮官である上原勇作参謀総長をモデルにしている。この作品が書かれた1921年には上原の指揮の下で日本陸軍はシベリア出兵を行っていた。既に出兵の大義は消失し、革命勢力の優勢が決定的になるにつれて撤退は必至となっていた。「月夜のでんしんばしら」は一見、幻想的な童話に見えるが、実はシベリア出兵を継続する日本軍部への批判の込められた作品だったのである。

**キーワード** 宮沢賢治、「月夜のでんしんばしら」、シベリア出兵、上原勇作、「カルメン」、「戦争と平和」、石川啄木

### はじめに

宮沢賢治の作品「月夜のでんしんばしら」は、1924（大正13）年12月に上梓された彼の唯一の生前刊行童話集『注文の多い料理店』のなかの一編である。目次には各編の書かれた日時が付せられており、この作品には「一九二一・九・一四」すなわち1921（大正10）年9月とある。

「月夜のでんしんばしら」は、ある晩、恭一という子どもが停車場近くの鉄道線路を歩いていると、突然、電信柱の列が兵士たちに変わり、北へ向かって軍歌を歌って歩き出す物語である。

彼らは工兵、竜騎兵およびてき（擲）弾兵で、電気総長と名乗るじいさんが号令をかけていた。総長は町の子である恭一に話しかけ、電信や軍隊

の話をする。そこへ汽車が来ると、全軍は普通の電信柱に戻る。その汽車の客車の電灯が消えているのを見て、総長は列車の下に潜り込み修理する。明るくなって喜ぶ子どもの声とともに汽車は停車場に着く、という幻想的な物語で、一般には子ども向けのファンタジーとして読まれている。

電信柱が動き出すという幻想には、賢治の盛岡中学の先輩でもある石川啄木の短歌からの影響があったと思われる。啄木の北へ走る電柱列の歌、すなわち「かぞへたる子なし一列驀地（ましぐら）に北に走れる電柱の数」が、賢治のこの童話「月夜のでんしんばしら」や詩「一本木野」に示唆を与えたことについてはすでに略報した（米地、2011）。

\* ハーナムキヤ景観研究所 〒025-0063 岩手県花巻市小舟渡237-3 イギリス海岸ギャラリー内

しかしながら、啄木がロマンに満ちたこの歌を詠んだ1908（明治41）年と賢治が「月夜のでんしんばしら」を書いた1921（大正10）年ころとでは、日本の北方の状況が変わり、人々の意識も変化していた。そのため、「月夜のでんしんばしら」は、童話的な書き方の背後にこの時代の世相、すなわち啄木の時代にはみられなかった、大正期の日本の明暗二面、オペラのロマンと軍部の暴走とを映す大人向きの作品でもあったと私は考える。特に、シベリア出兵の拡大延長という暴挙・愚挙を推し進めた日本陸軍首脳部に対する批判をこめた風刺的な作品であることを明らかにしたい。

## I 「月夜のでんしんばしら」に関する論点

### 1. 啄木の短歌と「月夜のでんしんばしら」との相違点

啄木の短歌「かぞへたる子なし…」歌は1908年7月号の『明星』に掲載された。その時、賢治は盛岡中学一年生で、のち三年生の頃から短歌を作り始めている。賢治の初期の歌は明星調であり、『明星』のバックナンバーも手にすることができたと考えられる。なぜなら、同窓の先輩啄木の短歌が掲載されている『明星』は盛岡中学の文学好きの生徒たちの中で回覧されていたといわれ、賢治もその一人であったからである。

この啄木短歌と賢治の童話「月夜のでんしんばしら」との関係を示唆したのは望月（2003）である。啄木歌の「走る」を「移動的に素早く動く」とするならば、宮澤賢治「月夜のでんしんばしら」の世界ともなる。>と述べている。

また、望月（2008）は啄木の「かぞへたる子なし…」歌と賢治の短歌「泣きながら北に馳せ行く塔などの/あるべきそらのけはひならずや」とを比較して論じている。そして「啄木が比喩的に表現した「電柱」も、賢治の手にかかれば走り出すことは童話「月夜のでんしんばしら」に見る通りである。>という。

明言はしていないものの、啄木短歌の「走る電柱」を踏まえて、賢治がイメージをさらに深め童話「月夜のでんしんばしら」を書いた、と望月が

解していることは明らかである。

私（米地、2011）は、「月夜のでんしんばしら」に啄木短歌の影響を読み取った望月の卓見に賛成であるが、「走る」よりもむしろ「北に」が重要で、「月夜のでんしんばしら」では電信柱は「一ぺんに北のはうへ」歩き出し、詩「一本木野」では「電信ばしらはやさしく碍子をつらね/ベーリング市までつづくとおもはれる」と書いている点に注目した。

この「北に」という点で啄木短歌の延長線上に位置するが、しかし啄木の歌やそれを受けて創られた賢治の「一本木野」と、この「月夜のでんしんばしら」との間には、実は大きな相違点がある。その相違点、すなわちこの物語の特異な点は次の諸点である。

- 電信柱が兵士に変身すること：電信柱や電柱、塔などのままではなく、なぜ彼らは兵士になるのか
- その兵士たちが走らず、歩くこと：走る、駆ける、というスピード感ある行動ではなく、なぜ彼らは歩くのか
- その数が一万五千と明示されていること：啄木の歌では電柱は数えられたことはない、とあるのに、なぜ一万五千人なのか
- この作品に限って「電気総長」というリーダーが登場すること：電柱や塔が自ら動くのではなく、なぜ指揮官が必要だったのか

「月夜のでんしんばしら」は電気や鉄道をテーマにした作品である、という従来の解釈ではこれらの疑問点は解決できない。

私が注目したのは、まず一番目の疑問、すなわち、電柱や電信柱が動くだけで十分メルヘン的であるのに、わざわざ兵士に変身させたことである。すなわち、賢治は電柱ではなく、兵士たちを描きたかったのである、そこで、賢治は電気や鉄道のことを書きたかったのではなく、軍隊を取り上げたかったのであった、という仮説を立て検証することにした。

## 2. 従来の研究と本稿の視点

これまでの「月夜のでんしんばしら」に関する論考は、ほとんどが電気と鉄道に着目したもの（鳥居 1984、安藤 1986、1996、大塚 1993、千葉 1996、加島 2011 など）であり、その殆どが地方の近代化を背景にした童話とみたものであった。

しかしながら、実は軍隊こそがこの物語のテーマであり、しかも書かれた当時のシベリア出兵に絡めた作品なのである。管見によればこれまで軍隊の問題中心にシベリア出兵とこの作品との関連について論じた例は、谷川（1985）と高橋（1996）の論述がある程度である。

谷川（1985）はこの作品をシベリア出兵のパロディで、〈シベリア出兵ごっこ〉の軽く陽気な作品と解し、「現実の敵も仮想敵も存在しない」と述べており、その論述には的外れな点<sup>1)</sup>も多い。

高橋（1996）はシベリア出兵との関連を当時の時代背景のなかで捉えようとし、北進という点にも着目しているが、「まっ赤」なエボレット<sup>2)</sup>の軍隊という点を重視し、これを赤色バルチザンと解したため、電信柱の軍隊は日本軍ではなく、交戦相手の方であると見てしまっている。

シベリア出兵との関係は明記しないものの、戦争との関連を指摘したものとしては萬田（1979）や清水（2007）の所論がある。萬田は、この作品が戦争そのものを描かず、戦争の持つ一種のムードを描いたもの、とし、戦争の悲惨さや人間性の無視は、ロマンチックな結末のために隠れてしまった、という意味の批判的な意見を述べている。

清水は、電信柱の軍隊は日本軍で、国家が彼らを北へと行進させている、と核心を突いた指摘をしているが、賢治作品にはオディプスの野望が隠されている、という清水の持論に沿う分析が殆どで、この軍隊についての深い考察は行っていない。

本稿はこれらとは異なり、「月夜のでんしんばしら」が電信柱の行進に日本軍のシベリア出兵を重ね、具体的には全軍を掌握し指揮する上原参謀総長と、シベリアに派兵される岩手駐屯の兵士たちとをモデルとしたシリアスな反戦、軍部批判を

試みたものであるという考えを提示する。

また従来「月夜のでんしんばしら」とオペラ「カルメン」のなかの歌曲「アルカラの竜騎兵」との関連についても触れられたことはなかった。大正の明るさと暗さ、すなわちオペラに人々が熱狂する大正ロマンの耽美的世界と、軍部が独走し国民を悲惨な海外の戦場へと駆り立て、現地民の怨嗟的となってゆく軍国主義時代の始まりとの二つがこのユニークな賢治作品のモチーフである。

さらに、兵士たちが欧州の古風な兵種で呼ばれるのは賢治がトルストイの「戦争と平和」やハイネの「二人の擲弾兵」などナポレオンのロシア戦役を描いた作品を念頭に置き、その戦役とシベリア出兵とを重ね合わせたためであったことを明らかにする。

## II 「月夜のでんしんばしら」軍歌の二面性 —日本の軍歌と「カルメン」—

### 1. 「月夜のでんしんばしら」と日本の軍歌

「月夜のでんしんばしら」は単に電信柱の列が動き出すのではなく、兵士たちに変身し行進することを、賢治は彼らが行進しながら歌う軍歌を自ら作詞作曲することで明示し、強調している<sup>3)</sup>。その曲をまず検討してみよう。

佐藤（1995）はこの軍歌が「主和音のド・ミ・ソによる上下進行の多様で、規律に厳しい軍隊のイメージを浮き上がらせているようにも思える」と述べている。では、どこの軍隊のイメージであろうか。

まず日本の軍隊のイメージに通ずる点を探してみよう。日本の軍隊の行進のリズムを代表するのは、日本陸軍のいわゆる進軍ラップで、「陸軍速歩行進（曲）その一」の冒頭部分のトテチテタの音である。弁のない信号ラップ（ビューグル）を吹くには唇の形の変え方を覚えねばならないから、夕行の発音の際の唇の形で教わる。つまりトテチテタはドファラファラである。

これに対して「月夜のでんしんばしら」の軍歌はどうであろうか。阿部孝の採譜ではへ長調であるが、比較のためハ長調にして並べてみる。曲と

歌詞とを重ねてみると次のようになる。(下線を付したドは、他のドよりも1オクターブ高い。)

曲：

ド ファファ ド ファファ ド ファファ ド

歌詞：

ドッ テ テ ドッ テ テ ドッ テ テ ド

すなわち、歌詞のドッテテは、進軍ラッパのトテチテタの出だしのトテの最初のトの音と同じド、次も同じくファとし、歌詞はドッと濁った字を当て、次のテの音でファまで同じく上げる。つまり歌詞の出だしのドッテテは、日本陸軍の行進の際のラッパの最初のトテをドッテと濁らせ、多くの電信柱が足並みを揃えて歩く音としてやや暗く重量感のあるオノマトベに変えたもの、と考えられる。しかし、進軍ラッパがそのあと高くラの音まで上がり高揚感があるのに対し、「月夜の…」軍歌は上がり重く暗い感じになる。中村(2001)もこの軍歌が軍隊ラッパの音感が基調になっているので、「ドミソ」が頻繁に使われていることを指摘している。

日本軍のラッパのトテチテタとの関係以外にも、指揮官の電気総長が、「お一二、お一二」と戦前の日本軍の号令をかけることから電信柱の軍隊は旧日本陸軍をイメージしていると推定できる。

なお欧米の軍隊(自衛隊も)では左、右、左、右…、という掛け声が多い。電気総長が日本語を話し、背が低く、黄色な顔をしているのも日本の将校らしい描写である。

## 2. オペラ「カルメン」からの影響

しかし賢治は、旧日本陸軍のみをモデルにしたのではなく、もう一つ、ヨーロッパの19世紀前半のやや古風な軍隊のイメージも電信柱の軍隊に付加している。登場する兵種は、工兵、竜騎兵、擲弾兵の三種で、後二者はすでに賢治の時代には過去のものとなった兵種で、日本陸軍では使用されたことはない。後述のように、これらの兵種の呼称を、賢治は主にオペラ<sup>4)</sup>を見たり、レコード

を聴いたりした折に知ったと考えられる。

この曲「月夜のでんしんばしらの軍歌」のドッテテ、ドッテテの部分と、曲想のよく似た曲は、ビゼー作曲のオペラのための「カルメン組曲」の中の歌曲「アルカラの竜騎兵」の冒頭部分であろう。この二つの曲を並べてみよう。(下線を付したドは一オクターブ高い。)

「月夜のでんしんばしらの軍歌」

ド ファファ ド ファファ ド ファファ ド

「アルカラの竜騎兵」

ファ ド ド ファ ド ド ファ ド シレド

このように、「月夜の」ドファファ、ドファファ、「アルカラ」がファドド、ファドド、と低高高という小節をともに繰り返している点が共通し、両者ともに二拍子の、いかにも軍隊の行進曲風で、出だしが良く似た感じになっている。しかし、「月夜の」は出だしの音階の上がり方がより小さいことと、全体が低音のため、重く暗いのである。

「アルカラの竜騎兵」はカルメンに誘惑されてゆく竜騎兵のドン・ホセ伍長が第二幕の第四景で歌う曲である。「月夜のでんしんばしらの」のなかに騎兵の電柱も登場するので、賢治はこの曲を想起して出だしを真似て、かつより暗い感じにしたのであろう。「アルカラの竜騎兵」は、日本の軍歌「抜刀隊」のちの「陸軍分列行進曲」に影響を与えているというが、私にはこの「月夜のでんしんばしらの軍歌」の方が、より似ていると思われる。

オペラが本格的に興行されるのは帝国劇場が開場された1911(明治44)年からで、1917(大正6)年からはいわゆる浅草オペラ<sup>5)</sup>が大衆的な人気を集めるようになる。そのブームのなかで「カルメン」は1918年以降各所で上演され、日本人に最も親しい演目となった。

大正期には賢治はしばしば上京してオペラを観ており、また流行歌となったオペラの劇中歌にも惹かれた。なかでも、1919(大正8)年1月の芸術座公演の「カルメン」に強い刺激を受けたようである。

当時、賢治は上京中であり、この公演を観た可能性もある。主演の松井須磨子は公演途中で自殺してしまうが、それが市井に劇中歌の人気をさらに高めることになった。劇中歌は翻訳ではなく、原歌の大意を採ったもので、北原白秋が歌詞、中山晋平が曲を担当し、「煙草のめのめ」「酒場の唄」「花園の恋」「恋の鳥」「別れの唄」が作られた。

賢治は「恋の鳥」の歌いだしの部分を、若干変えて、詩「習作」に組み込んでいる。すなわち、縦書きの詩の上辺に、この歌を装飾のように横書きで入れている<sup>6)</sup>。

また、中村(1996)は、賢治の「星めぐりの歌」は、同じく「カルメン」の劇中歌である「酒場の唄」のメロディの一部を取り入れているという。浜垣(2009)は賢治がこのカルメン公演を観たであろう、として詩「習作」と「星めぐりの歌」のほか、詩「葦露青」の女工たちの描写にも「カルメン」からの影響があることを見出している。

私はこの中村や浜垣の考えに基本的には賛成であるが、さらにその例として「アルカラの竜騎兵」から「月夜のでんしんばしら」への影響を新たに加えたい。

オペラ「カルメン」の対訳を行なった安藤(2000)によれば、メリメの原作ではアルマンサ聯隊の伍長なので、ビゼーも当初はそれに従ったが、のちにアルカラに改作した、といい、それは歌うときの響きをよくしたものだらうと述べている。

賢治も言葉の音楽的響きを重視しており、とりわけ「ラ」を好み、ワルトラワラがその好例である。この作品では電信柱を平仮名で「でんしんばしら」と表記しているのもラを示し、「アルカラの竜騎兵」と似た感じの「でんしんばしら」の兵隊」と歌うように読んでもらうことを意識したのであろう。

「六本うで木の竜騎兵」が最初に登場する工兵とともに重要であることは、賢治が自ら描いた「月夜のでんしんばしら」の絵が六本腕木の竜騎兵であることからわかる。

六本腕木を竜騎兵としたのは、竜騎兵がいわゆる肋骨服を着ていたためで、胸に肋骨のように何



図1 賢治自筆の水彩画の竜騎兵

本もの飾り紐が付いていたからである。六本の腕木をその飾り紐になぞらえたのであった。この肋骨服は明治期の日本陸軍将校の軍服にも採用された。

竜騎兵を「月夜のでんしんばしら」に登場させることにした時に賢治が「カルメン」を連想したのか、「カルメン」を賢治が観た、あるいは聴いた時に竜騎兵が登場する物語を書こうと思いついたのかはわからないが、いずれにしても「カルメン」の世界は賢治の「月夜のでんしんばしら」の場面に繋がっていたのである。

カルメンの竜騎兵は恋のために、その名誉ある竜騎兵伍長の誇りを捨て、遂には恋人カルメンを殺してしまう。「きりつせかいにならびなし」と歌う電信柱の軍歌のメロディが軍律違反の兵士をテーマにしたオペラのそれと似せたのも、賢治の風刺であるかもしれない。

さらにいえば、「月夜のでんしんばしら」の軍歌は、「アルカラの竜騎兵」から直接受けた影響と、「抜刀隊ないし陸軍分列行進曲」を経由した間接的影響との、双方を受けている、ということであろう。

以上のことから、「月夜のでんしんばしら」の軍歌は、日本陸軍の速歩行進の際のラッパとオペラ「カルメン」の竜騎兵の歌との両者を踏まえたものと推定され、したがって電信柱の軍隊は、日欧の二面性、すなわち当時の日本陸軍と、19世紀の欧州の軍隊との、二つのイメージを重ねたも

のと考えられるのである。

### Ⅲ シベリア出兵と電気総長のモデル上原参謀総長

#### 1. 電気総長とシベリア出兵

オペラ「カルメン」からの影響のほかに、電信柱の軍隊のイメージに旧日本陸軍のそれも重なっていることは、前述のようにドッテテという語がトテチテタのトテに繋がること、電気総長という指揮官が兵士たちに「お一二、お一二」と旧日本軍的な掛け声を発することなどからわかった。したがって指揮官もまた日本の陸軍軍人がモデルとなっていると推定される。

その旧日本軍的な掛け声をかける電気総長とは何者で、誰がモデルであろうか。自らを「電気の大将といふことだ。」と説明し、電柱の兵隊たちを「おれの兵隊」「ほくの軍隊」と呼び、「電気すべての長」であるという。それでいて、汽車の電灯が消えているのを見ると自ら、車両の下へ飛び込み、それを修理回復させるという技量も持っているという人物なのである。

のちに書かれた「シグナルとシグナレス」には、鉄道に沿う電信柱やシグナルを統括するのは「鉄道長」という肩書きを持っている、という設定になっている。国有鉄道の本線のシグナルと、軽便鉄道のシグナレスとの物語であるから、「鉄道長」という架空のポストを賢治は創ったのである。

それならば電信柱の軍隊を統括する架空のポストは「軍隊長」であることになるが、電信柱の軍隊の長なので電気の長としたのであろう。しかし、「電気長」でよいはずなのに、電気「総」長と特に「総」を付した点が実は重要なのである。

この電気総長は陸軍の参謀「総」長を寓意したものであるためと私は考える。日本帝国陸軍の形式上の最高指揮官は天皇であるが、参謀総長は全陸軍に軍令を発し、作戦や兵士の動員などを命ずる役割を果たし、全軍を掌握し、戦時には実質的最高指揮官となるという実質的には最高指揮官で、まさに陸軍の長であった。

この作品が書かれたころの参謀総長は上原勇作

陸軍大将(1856-1933)であった。彼は「工兵の父」と呼ばれたように日本工兵を近代化した功績があり、歴代の参謀総長中ただ一人の工兵科出身者で、工兵に必要な各種の技能もフランス工兵学校で学んだし、その他は独学でマスターし、後進にそれらを具体的に教えたという。

電信柱の軍隊を率いる電気総長という架空のポストは、通信工兵などとして電信柱を立て電線を架設する工兵も含む全工兵のトップである工兵監の地位にもあった上原に相応しく、率先修理に当たるのも上原らしきなのである。

当時の陸軍の作戦行動の殆ど全ては有線の電信で指令されていたから、軍の頂点に立つ上原参謀総長は、まさに電信柱を使って全軍を指揮した「電気総長」なのである。その電気総長は自らを「電気の大将」と言い換えて説明するのは、上原大将がモデルであることを含意しているのであろう。また、大声で部下を叱声した上原が、雷親父というあだ名で有名だったことも、電気総長という造語のヒントになった可能性がある。

上原勇作は大正期の陸軍を操った大物で陸軍三長官<sup>7)</sup>を全て歴任、のち元帥、子爵に叙せられた。1912(明治45)年に彼は陸軍大臣であったが、2個師団増設を主張し、軍縮を進める西園寺内閣に否決されるや、辞任して次の陸相を出さなかった



図2 上原勇作元帥『近世名士写真其一』昭和9年～10年(同頒布会発行)による

ため倒閣という結果を招くなど、軍が横暴をきわめる時代を作る先駆けを演じている。

この作品の書かれた1921（大正10）年には、上原は既に5年も参謀総長を務めており、年齢も60代半ば、当時としては高齢の現役の將軍で「ぢいさん」という電気総長の描写は、当時の上原と矛盾しない。この上原総長は、陸軍内の権力の頂点に立ち、さらなる陸軍の独走をリードしつつあった。

『注文の多い料理店』に収められた童話の一つである「月夜のでんしんばしら」に付された日付は、一九二一・九・一四で、まさに日本陸軍が上原参謀総長の指揮の下でシベリア出兵を行っていた時期にあたる。

上原の率いる参謀本部は1918（大正7）年8月にシベリア出兵が始まると、これを日本の軍事的な勢力拡大の好機と捉え、出兵国間の協定に反して増兵し、終始、派兵の継続を主張し、政府が他の派兵国と同様に日本軍の撤兵の方針を決めようとすると、統帥権侵犯として拒否したり、独自に戦線を拡大したりした。日本陸軍は、天皇が統帥する軍が作戦行動を始めれば、他からの容喙は許さないという統帥権の独立を根拠に、参謀本部が独走しうる状況を作っていたのである。

そして「軍事的行動は自己回転をはじめ、次第に膨大化してゆく。」と細谷（2005）は記し、「それとともに軍事的要求の前に外交の機能は従属化し」ていった、と述べている。

出兵を行なった連合国のうち、米軍が1920（大正9）年4月には撤退完了し、その他の連合国軍も同年8月までにすべて撤兵した。それにもかかわらず日本軍のみは大軍をシベリアに展開したままであった。

一方、1917年以降、大正天皇は病気のため公務にほとんど関わることができず、1921（大正10）年11月25日に皇太子（のちの昭和天皇）が摂政となるまでの期間は、陸軍の言う統帥権が大正天皇の手にないことは明らかな状況となり、参謀本部が独断的専横的な作戦行動を行なっていることも国民の知るところとなったのである。すな

わち、上原参謀総長は文中の電気総長のように、まさに日本陸軍を「おれの兵隊」「ほくの軍隊」のごとく彼の意のままにシベリア奥地へと進攻させたのであった。

1921年秋、この作品が書かれた時期には、三ヶ年も戦争が続き、チェコ軍救出という派兵初期の大義は既に存在せず、しかも革命勢力の優勢が決定的になるにつれて、日本軍の戦死傷者も増え、国民のなかには次第に厭戦・反戦の感情が広がっていった。

賢治はこの上原勇作という人物の経歴や役割、さらに当時の世論をも知った上で、彼をモデルに、電気総長として全電柱軍を指揮する大将とする一方、電気系統の修理などという工務もこなす老人というキャラクターを創ったのである。

## 2. 花巻と「月夜のでんしんばしら」の関係

「月夜のでんしんばしら」はイーハトヴ童話と冠した『注文の多い料理店』の作品の一つであり、広告ちらしには「うろこぐもと鉛色の月光、九月のイーハトヴの鉄道線路の内想です。」とある。電気総長のモデルが上原参謀総長とすると、なぜ彼がイーハトヴ、なかでも花巻に現れるのであろうか。

花巻を物語の舞台と推定したのは次の理由による。まずイーハトヴと想定した地域で鉄道が南北に走るのは当時東北本線のみであり、「大きなお城があるやう」な停車場というからには、ある程度大きい駅がある町ということになる。

総長が恭一に「おまへの町」の電気会社について語る場面があるが、通常賢治は市制をしいてるところは「市」と書いて町と区別しているので盛岡ではない。当時、町制をしき、しかも電気会社があるという設定に合うのは花巻（厳密にいえば花巻川口町）のみといえる。

電信柱の軍隊が花巻の駅付近を行進するという設定は、花巻が軍の演習地であったからである。盛岡に駐屯する騎兵聯隊や工兵大隊は、花巻の北上川周辺でしばしば訓練を行っていた。

賢治作品にも騎兵の演習については「イギリス

海岸」にその渡河演習、工兵の演習については「銀河鉄道の夜」に水中の発破作業の演習と、ともに花巻の北上川をモデルにした描写がある。賢治がのちに羅須地人協会を開く桜<sup>8)</sup>の宮沢家別荘の近くには工兵の宿舎(陸軍工兵演習廠舎)があった。

工兵は以前からこの兵種名なのでそのまま「工兵」として、騎兵は古風かつ洋風に「竜騎兵」と呼ばれ、一方、離れて行進するのは歩兵で「てき(擲)弾兵」として登場する。「まっ赤なエポレット」をしている、というのは歩兵の肩章(正しくはエポレット)は赤いからである。陸軍の行進の主役は歩兵であるのに、それが脇役なのは花巻とは縁が薄いためであろう。

工兵と騎兵は盛岡に駐屯しており、その主要な演習地の一つが花巻だったのである。当時、岩手県は弘前の第八師団<sup>9)</sup>の管内で、その師団の主力をなす歩兵旅団は弘前や青森、秋田に駐屯しており、盛岡には騎兵2個聯隊と工兵1個大隊が駐屯していた。

電信柱の兵隊が一行一万五千人というのは、第八師団の全構成員数を指すと考えられる。師団の構成員数にはかなり幅があるが、おおむね九千人から二万人超で、ほぼ一万五千人というのが常識的な人数とあってよい。「歩はばは三百六十尺」つまり約100mであり、これに先の人数をかけると、1500km、花巻から北サハリンのアムール河河口対岸付近に達するのである。

実はこのころ、すなわち1921(大正10)年は夏ごろから第八師団、なかでも身近で演習を見る機会が多く花巻の人々のなじみ深い工兵大隊がシベリアに派遣されるという噂が報ぜられ、シベリアに赴く工兵に対する同情もあり、引き続き、さらに盛岡の騎兵や弘前の歩兵なども、次々に派遣されるのではないかと、という懸念もあった。

「月夜のでんしんばしら」は、まさにその時点(1921年9月)で執筆されたのであり、北へ進む一万五千人とはシベリアに向かう第八師団を想定しているのであろう。

この工兵部隊は同年12月27日に盛岡の兵営を発ち、翌日船川港から出国、ウラジオストク近郊

のシュコトヴォに駐留した。翌1922(大正11)年秋、全日本軍のシベリア撤退(ただし北サハリンにはなお駐屯を続けていた)にともない、同工兵中隊も盛岡に帰還した。

陸軍の主力は歩兵であり、第八師団も、構成する3個旅団のうち二つは歩兵旅団である。電信柱の軍隊も当然、擲弾兵すなわち歩兵が主役であるべきなのに、後ろの方に見えるのみで、工兵や竜騎兵(騎兵)が前面に登場するのは、この両者が花巻で演習を行なっているからで、歩兵は大演習の場合などを除けば、通常、花巻では見かけないのである。

賢治は彼ら電信柱の軍隊を勇ましく行進する姿としてのみ描いたわけではなく、工兵の列の中に、疲れて、よろよろと脚を引きずり肩を支え合って歩く柱たちの描写もあり、また、賢治が自ら描いたデッサンの六本腕木の竜騎兵の姿にも勇ましさはなく、ひ弱な感じさえする。これらは彼が軍隊やシベリア出兵に対して抱いた感情を示しているのである。

この竜騎兵の絵について福島(1996)は、「生々しくリアルで、いくらか不気味な相貌をおびている」と述べ、「顔はいささか陰気、不吉で、死のイメージすら感じられる。」と評した。この指摘は当たっているが、福島はそれが賢治の知覚が病的な変容をしたため、と精神医学の専門家らしい理由付けをしている。しかし、この暗い風貌は、出征する兵士の暗い運命を暗示するもので、賢治の反戦的な考えを反映したものであるべきである。

もっとも、そのような感情は賢治のみのものではなかった。当時、この出兵にすでに大義はなく、国際的にも非難を浴び、戦死戦傷者も増加する一方で、全国的に厭戦・反戦の気運が蔓延しつつあったのである。

啄木が前記の「北に走れる電柱列」の歌を詠んだ1908年は、ちょうど1906年から始まった日露両国による国境画定作業が同年に終了し、ようやく正式に日本領としての南樺太が定まった年である。北に広がった国土に希望を託し得た時代であった。いわば一朶の白い「坂の上の雲」を目

指して、その坂の上に到達したかに見えた時代であった。

それに対して、賢治が「月夜のでんしんばしら」を書いた1921年は、北へ勢力を広げようとする軍部の野望が、統帥権なるものをふりかざして、政府の外交方針を無視し、国際世論にも抗して、戦線を拡大し大軍を他国の奥深く派遣したあげく、泥沼の消耗戦を続けて多数の犠牲者を出し、士気は落ち、軍紀は乱れる、という同時代人から

さえ「無名の師」（大義名分のない戦争）と評された戦争を続けたのである。

それは、のちに中国において行なった戦線のとどまることなき拡大から1945年の敗戦に至る「坂の下」へと転げ落ちてゆく軍国日本の崩壊への第一歩ともいえるものであった。

#### IV 「月夜のでんしんばしら」と「戦争と平和」・「二人の擲弾兵」

##### 1. 竜騎兵・工兵とトルストイの「戦争と平和」

「月夜のでんしんばしら」が書かれた当時、陸軍は弘前に第八師団司令部を置き、青森、岩手、秋田の3県を管区としていた。

「月夜のでんしんばしら」のなかに登場する兵種名と弘前師団の当時の兵種とは次のように対応する。なお、括弧内には岩手県と特に関わりの深い点を記した。

物語の中の兵種→弘前第八師団の兵種（駐屯地など）

- 工兵 → 工兵（盛岡の工兵大隊所属、花巻・盛岡が主な演習地）
- 竜騎兵 → 騎兵（盛岡の騎兵聯隊所属、盛岡・花巻が主な演習地）
- 擲弾兵 → 歩兵（弘前の歩兵旅団所属、弘前、青森等に聯隊が駐屯）

シベリア出兵をテーマにした「月夜のでんしんばしら」に最初に登場する兵隊である工兵は当時の日本陸軍と同じ名称であるが、騎兵は竜騎兵、歩兵は擲弾兵と、1812年ナポレオンロシア戦役当時、ナポレオン軍が用いていた古風な名称に置き換えている。

ナポレオン軍において竜騎兵は、胸甲騎兵、ユサル（主力軽騎兵）、獵騎兵、槍騎兵などの各種騎兵の中で、最も花形の精鋭でエリートであった。「月夜のでんしんばしら」の竜騎兵は前述のように「カルメン」からヒントを得て登場させたものであるが、さらに賢治がトルストイの「戦争と平和」からナポレオン軍の竜騎兵をもイメージして描いたと考えられる。



図3 『岩手日報』大正10年7月8日の第八師団関連記事

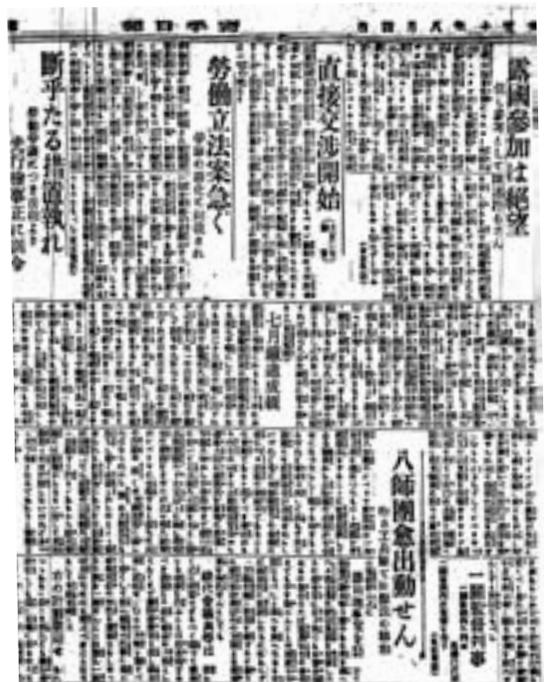


図4 『岩手日報』大正10年8月4日の第八師団関連記事

賢治が「戦争と平和」を読んでいたことは、1917年、彼の盛岡高等農林時代に同人誌『アザリア』に寄稿した「『旅人のはなし』から」に、「旅人はある時、『戦争と平和』と云ふ国へ遊びに参りました、そこで彼はナタアシアやプリンスアンドレイに合（ママ）ひました」というくだりがあることから明らかである。その「戦争と平和」にはナポレオン軍の「青い軍服のフランス竜騎兵」（中村白葉訳、1966）が戦闘場面に登場する。

竜騎兵は19世紀の戦闘に向いていたので、近代日本の騎兵もこれに倣っている。その日本騎兵の中で最も優秀とされたのが、花巻でも訓練していた盛岡騎兵聯隊で、工兵に続いて派兵される可能性が高いと噂されていた。

トルストイはロシア戦役におけるナポレオン軍の侵攻と敗退を克明に描き、戦争の悲惨さを描いた。竜騎兵聯隊も多くの人馬を失い壊滅した。1864年から69年にかけて「戦争と平和」を執筆したトルストイの意図は貴族と農民がこの大戦争のなかで生きてゆく様を描き出すことであり、戦争そのものが主題ではなかったが、読者に戦争の残酷さと虚しさを強く訴えるものとなった。賢治もまたトルストイの反戦的姿勢を読み取り、共鳴したのであろう。

工兵という兵種名も古く、ナポレオン戦役当時にも使われていた。すでに欧州では16世紀から独立した兵種であって、仏独では工兵隊はピオニエール（先鋒）隊として重視された。もちろん1812年のナポレオン軍ロシア戦役においても同様であった。

特に興味深いのは、「月夜のでんしんばしら」の電気総長のモデル上原参謀総長と似た経歴の参謀総長がロシア戦役のナポレオン軍にもいたのである。並べてみると、

ロシア戦役のナポレオン軍：

参謀総長は工兵出身のルイ・アレクサンドル・ベルティエ元帥

シベリア出兵の日本軍：

参謀総長はフランス工兵学校で学んだ工兵出身

の上原勇作元帥

「月夜のでんしんばしら」は、シベリア出兵をテーマにしたものであることを述べてきたが、賢治はさらに、このシベリア出兵の日本軍とロシア遠征のナポレオン軍とを重ね合わせている。両軍ともロシアの大地深く攻め込みながら戦果は上らず、ナポレオン軍は惨憺たる敗北で壊滅し、日本軍も敗走ともいえるような撤退を余儀なくされた。

「月夜のでんしんばしら」は、その無意味な出兵の末期に戦地に送り込まれる盛岡の工兵（花巻を訓練地にしていた）への同情と、この出兵を無謀にも拡大した上原参謀総長に対する批判とが生んだ作品であった。それをナポレオン戦争と重ね合わせ、いかにも童話風にするとともに、ナポレオン軍の末路と同じ運命を予言した強烈な時局批判の作品としたのである。

## 2. 擲弾兵とハイネの「二人の擲弾兵」

「月夜のでんしんばしら」には、もう一つの兵種「擲弾兵」（原文では「てき弾兵」）が登場する。擲弾兵は歩兵の一種で、手榴弾を装備したものを指していたが、ナポレオン軍では通常の歩兵（フュジリエ）から長身で経験豊富な者を選び、擲弾兵と呼称し最強の精鋭部隊を組織させた。

「戦争と平和」には「胸のあいた青い軍服をつけ、毛ばだった帽子をかぶった」（中村白葉訳、1966）軍装の擲弾兵も書かれているが、あまり目立つようには描かれていない。

しかし、賢治は擲弾兵については「チューリップの幻術」にもドイツトウヒの形容として用いている。それはスックと立つ樹形を若い兵士に、20cm近い大きく長い球果（松ぼっくり）を手榴弾に、それぞれ見立てたらしい。

では賢治は何から擲弾兵を知ったか。それは、ハイネが1820年に創った詩をシューマンが1840年に歌曲にした「二人の擲弾兵」から学んだと思われる。この詩もナポレオンのロシア遠征すなわち1812年ロシア戦役をテーマとしている。「二人

の擲弾兵」に直接言及した賢治作品はないが、彼がこの歌を知っていたことはまず間違いないであろう。

賢治はハイネの詩が好き<sup>10)</sup>で「二人の擲弾兵」はハイネの最も有名な詩集『歌の本』のなかにある。賢治は「二人の擲弾兵」の作曲家シューマンも好きで童話「セロ弾きのゴーシュ」では猫がシューマンの「トロイメライ」を弾いてくれとゴーシュに頼む。

これらのことから、「月夜のでんしんばしら」の腕木を組んでよろよろと倒れそうになりつつ歩く二本のはしらは工兵ではあるが、この「二人の擲弾兵」すなわちロシアに敗れたナポレオン軍の二人の擲弾兵が、傷つき、よろめきながらも祖国の皇帝に殉じようとする壮絶な姿をイメージした蓋然性が高い。賢治にとっては、祖国愛よりも、最後までともに歩もうとする友愛に共鳴したのであろうことは、賢治の親友保阪への書簡などから窺える。

## V 賢治と「北」「電柱」「戦争」

### —啄木との比較—

#### 1. トルストイから啄木と賢治が学んだもの：「非戦」と「反戦」

賢治は戦争に対してどのような姿勢をとっていたであろうか。彼は「鳥の北斗七星」のなかの鳥の大尉のように、反戦的信条を持ちつつも、信ずるものが命ずるならば、戦わねばなるまい、と考えていたようである。

三上（2009）は賢治が熱河作戦に従軍中の教え子に宛てた手紙を取り上げ「賢治が、『鳥の北斗七星』や『双子の星』にみせたような非戦の思想を貫けなかったのは、事実として認めざるをえません」と書いている。賢治の書簡についてはここでは論じないが、賢治は厳密に言えば非戦ではなく、反戦であったと私は考える。そして「戦争と平和」執筆時 1864～69 年のトルストイも反戦的な立場であったようであり、その雰囲気をも 1921 年の賢治は読み取って「月夜のでんしんばしら」を書いたのである。

トルストイの戦争論というとすぐ想起されるのは石川啄木の「日露戦争論」である。日露戦争中、日本の捷報を喜び、日本にとっては義戦であると述べていた啄木は、戦後、トルストイの非戦を主張する「爾曹（なんじ）悔改めよ」という論文（『平民新聞』掲載の訳文）を読み感動、その筆写に解題を添えて「日露戦争論」という文を書いた。1904 年にトルストイが書いた非戦論に 1911 年の啄木が共鳴したのである。

なお、この啄木の文は改造社の啄木全集（1928～29）に活字化されたので、賢治も生前、目にした可能性はあるが、もちろん「月夜のでんしんばしら」執筆時には知らなかった。

これまで、トルストイと賢治の関係については遊座（2009）、啄木と賢治の戦争に関わる作品については望月（2006）、の優れた論文があるが、「月夜のでんしんばしら」の検討によって、トルストイと啄木と賢治の戦争観の関連や相違についても新たな視点が見出されたのである。

#### 2. 「反戦」の物語としての「月夜のでんしんばしら」と「飢餓陣営」

前述のように童話集『注文の多い料理店』の目次には各篇に日付が付されており、「月夜のでんしんばしら」は 1921.9.14 である。その 1921（大正 10）年 7 月 8 日の『岩手日報』には「真か偽か 第八師團出動説」の見出しで、第八師團が第十一師團と交代してシベリアに出征することに決定し、命令が交付された、という噂の真偽が記事になっている。

また、同年 8 月 4 日付の同紙には「八師團愈出動せん 昨夜工兵隊で国際法の講和（話の誤植）」の見出しの記事が載った。各隊、少なくとも工兵第八大隊は既に出征の準備中であることは事実である、という趣旨の記事であった。

名誉ある竜騎兵の身分を捨て、恋に生きようとするドン・ホセ、大義なき戦いに動員されてゆく日本兵、前者は大正ロマンの耽美的な世界、後者は軍部のどす黒い野望が青年たちを戦場へと駆り立てる大正から昭和へと続く闇の世界、を描いて

いる。良く似たメロデイの行進曲に乗りながら、ドン・ホセは明るく「アルカラの竜騎兵」を、でんしんばしらの兵隊は暗く「でんしんばしらの軍歌」を、歌い歩むのである。

この作品「月夜のでんしんばしら」の兵士像は、竜騎兵ドン・ホセ伍長が、カルメンの魅力にひかれ、軍律に背き、ついには軍隊を脱走してしまう、その竜騎兵の姿と、シベリアに派兵される日本兵の姿と、その二つを重ね合わせたことから、賢治の意図した反戦のメッセージが読み取れるのではないだろうか。

賢治は、全作品中、唯一、この物語にのみ文と歌と絵の三点セットを自ら用意した。描かれた竜騎兵はヒョロリと細く頼りなげな感じで、強そうには見えず、軍歌は「アルカラの竜騎兵」に似ていながら、暗く重い。賢治は電信柱の軍隊が勇氣凜りんというイメージからは遥かに遠いことを、自筆の絵と自作の軍歌とで間違いなく伝えようとしたのである。

シベリア出兵の日本軍を、かつて同じようにロシアの国土深く攻め入って、結局は無残な敗退をしたナポレオン軍と重ね合わせる操作を賢治は行ったと読み取ることができる。戦果上がらず、死傷者が増すばかりで、軍律も乱れているという噂の戦場に、身近に接していた工兵隊が派遣されることへの強い懸念、それは反戦に繋がるものであり、それを内包した作品なのであった。

「月夜のでんしんばしら」はそのような動向を背景に書かれた、明らかに工兵隊への参謀総長からの出動命令に対する批判を秘めた物語なのである。

なお、従来、シベリア出兵への反戦的意図をこめた作品と言われていた「烏の北斗七星」は、『注文の多い料理店』の中の日付が1921.12.21で、工兵隊の年末12月27日の盛岡駅からの出征直前に書かれている。杉浦(2001)はこのことについての報道が執筆の契機になったと推定した。

もう一作「氷河鼠の毛皮」は、木佐(1990)によってシベリア出兵との関連が指摘された。すなわち、「烏の北斗七星」とこの童話は1921年12月の工

兵部隊のシベリア出兵と関連していることを指摘した。この作品は1923(大正12)年4月15日に『岩手毎日新聞』に掲載されたもので、二年前のシベリア派遣の工兵隊と、1923年のこの作品掲載の一週間後に盛岡を出発し、北サガレン(北サハリンに対する当時の呼称)へ派遣される予定の工兵隊との双方を視野に入れつつ書いたのであろう。

さらに賢治作品のなかでシベリア出兵と関連するものとして、私は戯曲「飢餓陣営」を加えたい。賢治はオペラやオペレッタを観るばかりではなく、農学校教師時代には自ら台本を書き、生徒たちに上演させた。なかでも「バナナン大将」とも呼ばれる「飢餓陣営」は代表的な劇で、現在に至るまでしばしば上演されている。

初演は1922(大正11)年9月、稗貫農学校生徒によるもの<sup>11)</sup>で、同年6月によくやく政府が撤兵を決定し、10月までに沿海州からは引き揚げ、北サガレンのみの駐兵となった、という時期に当たる。

この劇を賢治はコミックオペレットと呼び、阿部(2008)が浅草オペラの影響を強く受けた明るくユーモラスな作品と解したように、愉快でしかも農学校らしく果樹の選定法も取り入れた、戦争の悲惨さなどとは遠いものと一般には受け取られている。

しかし、勲章を沢山着け、後方で飽食していたバナナン大将と、激戦が止んだ前線の陣営で飢えに苦しみつつ待っていた兵士たちとの対比は、東京で栄達する上原参謀総長とシベリアや北サガレンで苦闘する兵士たちとの関係を風刺していると考えられる。上原は陸軍大将、男爵であったが、この1922年4月に元帥に列せられ、爵位も子爵へと上った。

一方、北サガレンには、同年5月に青森歩兵第五聯隊が派兵されていた。この聯隊には岩手出身者も多い。その第五聯隊を念頭に置いた劇であることは、森(1939)の記している劇冒頭の歌(現存原稿には欠けている)が「私は五聯隊の古参の軍曹」と歌いだしていることから裏付けられる。

この「飢餓陣営」論は別報(米地・熊谷、未発

表)において詳述するが、この戯曲は「月夜のでんしんばしら」の続編とも言うべきものであり、兵士たちを犠牲にして、功績を積む將軍への批判を、賢治はさらに鮮明にしているのである。

啄木の絶対的な非戦の思想に比して、賢治のシベリア出兵というその時代の戦争に対する、いわば相対的な反戦の感慨や、それを童話や軽喜劇のなかに忍ばせた手法は、生ぬるいという批判もある。しかしながら、大正デモクラシーと呼ばれてはいるものの、むしろこの時代の方が日露戦争当時よりも言論の自由は失われていた<sup>12)</sup>。一見、ファンタジックな童話に、反戦と軍部批判を盛り込んだのは、賢治の精一杯の抵抗だったのである。

## おわりに

「月夜のでんしんばしら」は宮沢賢治の童話の一つとされている。確かに主人公は恭一という子どもであり、話の最後にその子が見た幻想も汽車に乗っていた小さな子が「あかるくなった、わあい。」と叫び、何事もなかったように汽車が停車場に着く。子ども向きのファンタジーとして読まれているのは当然である。

しかしながら、一見、子ども向けに見える賢治のいわゆる童話が、実はシベリア出兵に対する批判を盛り込んだ大人向けの反戦物語であった。

従来、シベリア出兵と関わる賢治作品として「鳥の北斗七星」と「氷河鼠の毛皮」との両作品が取り上げられ、論じられてきたが、この「月夜のでんしんばしら」は新たにそれらに加えるべきものであるとともに、三作品の最初に書かれ、花巻を演習地としていた工兵隊や騎兵隊を念頭に置き、彼らのシベリア派兵に対する批判を込めながら書いた、反戦的意識の最も明瞭なものとしてきわめて重要な作品であったのである。

賢治は花巻という風土の子であり、大正から昭和初期という時代の人であった。「月夜のでんしんばしら」はその賢治の鋭い軍部批判を縦糸にオペラやロシア文学に惹かれるロマンチズムを横糸に織り上げられた作品なのであった。

## 【注】

- 1) 例えば、〈竜騎兵やてき弾兵は、砲兵を軍の基幹とするナポレオンの新戦術によって一掃された〉などと史実と異なる説明をしている。
- 2) 肩章、賢治はエポレットと書くが、これは当時の一般の言い方で、本来はフランス語のエポレットが正しい。
- 3) なお、この「月夜のでんしんばしら」の軍歌は、賢治の作曲ではあるが、彼の原曲の楽譜は残っておらず、阿部孝が採譜したものに拠っている。
- 4) 日本においてオペラが初演されたのは1894(明治27)年の日清戦争傷病兵義捐金募集の慈善興行(赤十字社主催)であり、やや知られるようになったのは日露戦争時の歌舞伎座の「露営の夢」のころからである。ともに戦時の時流に合わせたものであった。
- 5) これらのオペラについてはあとの章で詳述するが、その記述には内山(1957)、曾田(1989)の著書を参照した。
- 6) この箇所が、保坂嘉内が白秋の詩を改作したものであった、ということは浜垣(2009)が紹介している。
- 7) 帝国陸軍には三つの最高位、陸軍大臣、参謀総長、教育総監があり陸軍三長官と呼ばれていた。そのなかで実際に軍を掌握し、戦争を指揮するポストが参謀総長であった。上原はこの三者全てを歴任した最初の人物で、以後も杉山元がいるのみである。上原の参謀総長在任期間は1923(大正12)年3月まで8年余りに及び、「上原時代」を築いた。
- 8) 桜は地名、当時桜は根子村の一部であったが、同村は1923年6月に花巻川口町に合併した。
- 9) 第八師団は弘前に司令部を置き、歩兵第4旅団、歩兵第16旅団、騎兵第3旅団を中心に野砲兵、工兵、輜重兵の各大隊などから構成されていた。盛岡には騎兵第3旅団の司令部と騎兵第23、24の両聯隊、さらに工兵第八大隊が駐屯していた。
- 10) 賢治童話「土神と狐」の最も印象的な場面は、ライバルの土神に殺された狐が持っていたものは、カモガヤの穂が二本のみで、高級な品々を持っていると言っていたのは虚勢だったという結末である。本当に狐が持っていた物は、恋人の樺の木に貸したハイネの詩集一冊のみだった。賢治自身の分身ともみえる狐にハイネの詩集をただ一つ持たせるほど、賢治はハイネを愛読していたのである。
- 11) 賢治の演出による農学校生徒たちの「飢餓陣営」上演は、その後、1923(大正12)年5月、花巻農学校(郡立稗貫農学校が県立に移管し改称)の開校記念行事の一環として行われ、次いで賢治の演出による農学校生徒たちの「飢餓陣営」上演は、その後、翌1924(大正13)年8月にも行われた。森(1960)は堀籠から、昼夜二回上演し、昼は生徒に、夜は一般公開とし校外の人たちを招待したと、聞き取っている。
- 12) 1917年のロシア革命以降、政府は革命を恐れてそれを封ずるための方途を立て始めていた。例えば1920年、過激運動取締法案を国会に上程し、廃案とはなったが、翌年、勅令により実質的に治安維持法(1925年公布・施行)に繋がる厳しい思想弾圧の路線が敷かれた。

## 【引用ならびに参考文献】

- 秋保美保 (2006) 月夜のでんしんばしら、国文学 解釈と鑑賞、71,155-158
- 阿部由香子 (2008) 飢餓陣営 (劇)、国文学編集部編、宮沢賢治の全童話を読む、学燈社、56
- 安藤恭子 (1986) 月夜のでんしんばしら—幻想と逸話の再構成—、国文学 解釈と鑑賞、51-12、106-111
- 安藤恭子 (1996) 宮沢賢治〈力〉の構造、朝文社
- 安藤元雄訳 (2000) ビゼー カルメン、音楽の友社
- 元帥上原勇作伝記刊行会 (1938) 元帥上原勇作伝 上・下、同刊行会
- 内山惣一郎 (1957) 浅草オペラの生活、雄山閣
- 大塚常樹 (1993) 宮沢賢治 心象の宇宙論 (コスモロジー)、朝文社
- 加島篤 (2011) 童話「月夜のでんしんばしら」の工学的考察、北九州工業高等専門学校研究報告、44, 27-39
- 木佐敬久 (1990) 宮沢賢治とシベリア出兵 1 氷河鼠の毛皮、天秤宮、1, 35-88
- 佐藤泰平 (1995) 宮沢賢治の音楽、筑摩書房
- 清水正 (2007) 童話集「注文の多い料理店」を読む、D 文学研究会
- 杉浦静 (2001) 『鳥の北斗七星』小考—草稿まで—、国文学 解釈と鑑賞、66-8、147-151
- 曾田秀彦 (1989) 私がカルメン マダム徳子の浅草オペラ、晶文社
- 高橋康雄 (1996) 〈注文の多い料理店〉伝、春秋社
- 谷川雁 (1985) 賢治初期童話考、潮出版社
- 谷村長敬 (1995) 「月夜のでんしんばしら」考—佇立する少年—、赤坂憲雄・吉田文憲編、『注文の多い料理店』考、五柳書店、179-198
- 千葉裕之 (1996) 「鉄道線路の横の平らなところ」から見えた光、宮沢賢治の魅力を語る、18-28、でくのぼう出版
- 鳥居邦朗 (1984) 『月夜のでんしんばしら』—心象断片—、作品論 宮沢賢治、24-34、双文社出版
- トルストイ (中村白葉訳) (1966) 戦争と平和、1・2、河出書房新社
- 中村節也 (1996) 賢治歌曲のルーツ、宮沢賢治の魅力を語る、第2集、218-241、でくのぼう出版
- 中村節也 (2001) 賢治の軍楽「替え歌と時代背景について」、宮沢賢治研究 Annual.11, 141-155.
- 浜垣誠司 (2009) 宮澤賢治の詩の世界、  
<http://www.ihatov.cc/blog/archives/2009/12/post671.htm>
- 福島章 (1996) 不思議の国の宮沢賢治 天才の見た世界、日本教文社
- 藤田圭雄 (1995) 白秋愛唱歌集、岩波書店
- 細谷千博 (2005) シベリア出兵の史的研究、岩波書店
- 前坂俊之 (2011) 軍閥研究—「陸軍工兵の父と言われる」—上原勇作陸軍大臣の誕生と上原閥の形成について、Maesaka Toshiyuki official Homepage.2011/12/24、1-4、<http://cache.yahoofs.jp/search/cache?C=Ehc-jn-oSjEJ&p...> 2012/01/23 取得
- 萬田務 (1994) 宮沢賢治 自然のシグナル、翰林書房、(初出は1959、『注文の多い料理店』試論、橘女子大学研究紀要、第6号)
- 三上満 (2009) 賢治の北斗七星—明日へのバトン、新日本出版社
- 望月善次 (2003) 石川啄木 歌集外短歌評釈 I、信山社
- 望月善次 (2006) 石川啄木と宮沢賢治の戦争歌—二人の徴兵検査にも触れながら—、新日本歌人、2006-4, 50-57
- 望月善次 (2008) 啄木の短歌、賢治の短歌 11, 走る電信柱1, 盛岡タイムス Web News、2008年4月26日
- 森惣一 (1939) 宮澤賢治全集、第三巻解説、十字屋、なお、宮沢清六ほか編 (1944) 宮澤賢治全集 (校訂版) 別巻附録 35-81、を参照した。
- 森莊巳池 (1960) 野の教師 宮沢賢治、普通社
- 遊座昭吾 (2009) 「雨ニモマケズ」ノート—トルストイと賢治、国文学 解釈と鑑賞、74 (6)、108-112
- 米地文夫 (2011) 啄木の北をめざす電柱列の歌は賢治の幻想的な作品へと繋がった、国際啄木学会盛岡支部会報、20.10-15.
- 米地文夫・熊谷誠 (未発表) 宮沢賢治戯曲「飢餓陣営」とシベリア出兵および岩手大凶作
- Sarah M.Strong (tr.) (2000) Kenji Miyazawa: The Telegraph Poles on a Moonlit Night、国際言語文化振興財団

## Kenji Miyazawa's "The Telegraph Poles on a Moonlit Night" and the Dispatch of Troops to Siberia: The Relationships between Takuboku's Tanka, "Carmen", and '*War and Peace*'

Fumio Yonechi

### Abstract

Kenji Miyazawa was strongly influenced by tanka written by Takuboku Ishikawa. Takuboku's tanka about telegraph poles running toward the North also influenced Kenji's fairy tale, "The Telegraph Poles on a Moonlit Night." In this fairy tale, a line of telegraph poles along the tracks near a station transform into a rank of soldiers and start marching under the orders of the Chief of Electricity. When a train comes, the soldiers return to being telegraph poles. Up to now, this fairy tale was considered to be a story about electricity and railroads. However, it was later discovered that the tale is based on the mobilization of the Japanese troops dispatched to Siberia, particularly, the Corps of Engineers stationed at Morioka, which were engaged in exercises in Hanamaki. This Corps of Engineers' war song, composed by Kenji Miyazawa, was based on Bizet's opera *Carmen Suite Les Dragons d' Alcala* and the Japanese Army's trumpet songs. With the introduction of old-fashioned names for soldiers from 19th century Europe, such as Dragoons and Grenadier Guards as well as the Corp of Engineers, and the dispatching of Japanese troops to Siberia, Kenji duplicated the defeat of Napoleon's army which attacked Russia, bearing in mind Tolstoy's novel, *War and Peace*, and Heine's poem, *Die beiden Grenadiere*.

The Chief of Electricity was modeled after the Chief of the General Staff, Yusaku Uehara, who was functionally the captain general of the Japanese army at that time. In 1921, when this piece was written, Japanese army troops were dispatched to Siberia under the command of Uehara. At that time, the reason for mobilization had already become unclear and as the predominance of the revolutionary force became decisive, retreat from Siberia was inevitable. Although "The Telegraph Poles on a Moonlit Night" is primarily an illusionary fairy tale, it is also a piece criticizing the Japanese army which continued to dispatch troops to Siberia.

### Key words

Kenji Miyazawa, "The Telegraph Poles on a Moonlit Night",  
The Dispatch of Troops to Siberia, Yusaku Uehara, *Carmen*,  
*War and Peace*, Takuboku Ishikawa